

霞ヶ城(霞城, 手塚屋敷, 手塚城) (指定無) (諏訪郡下諏訪町上久保) (ホテル山王閣)

治承年間（1177～81）に手塚光盛によって築かれたと伝えられるが、詳しい築城の経緯は明らかでない。光盛は、諏訪大社下社大祝金刺盛澄の弟で、木曾義仲が挙兵するとこれに従い、寿永二年（1183）の篠原の戦いで斎藤別当実盛を討ち取ったことで知られる。

近年では、光盛は現在の上田市手塚を本貫地としていたと考えられているが、どのような経緯でいつごろ諏訪から移ったのかは不明である。寿永三年（1184）、光盛は義仲に最後まで付き従い、討ち死にした。光盛が諏訪を去った後、あるいは討ち死にした後に、霞城は兄盛澄の手に渡ったものと推測される。盛澄は、義仲の死後源頼朝に処刑されそうになったが、梶原景時の取り成しによって頼朝の前で流鏑馬の技芸を披露し、それに感服した頼朝によって赦免された。

その後も、霞城は金刺氏の平時の居館であったと考えられるが、確証はない。文明十五年（1483）、惣領家と大祝家に分かれていた諏訪氏に内紛が起きると、金刺興春は大祝家の諏訪継満と謀って、惣領家の諏訪政満を殺害した（文明の内訌）。興春は高島城を攻略したが、惣領家の家臣らと戦って討ち死にし、首を大熊城に晒された。このとき、下社は惣領家の兵によって焼き討ちに遭ったとされ、霞城も焼失したものと推測される。

その後、諏訪氏を統一した政満の子頼満は、次第に金刺氏を圧迫するようになった。永正十五年（1518）、頼満は興春の子とも孫ともいわれる昌春を「萩倉ノ要害（『当社神幸記』）」に攻め、金刺一族は甲斐の武田氏を頼って落ち延びた。霞城がこのときまで存続していたかは微妙であるが、あったとすれば、遅くともこのときに廃されたものと考えられる。霞城は、諏訪大社下社秋宮の鎮座する台地の先端に位置しており、現在はホテル山王閣となっています。敷地内には、城址説明板のほか、金刺盛澄の銅像が建てられています。明確な遺構はありませんが、ホテルと大社敷地の間には切通状の道路が通っており、その上に橋が架かっています。この切通し道が、もともとの地形を利用したものであれば、台地の付け根を断つ堀切の跡ではないかと思われます。そして、もし堀切跡であるとすれば、霞城は盛澄・光盛兄弟の時代を下ってなお使用されていた可能性が高くなるものと考えられます。後に、信州が争乱の舞台となるに及んで居城が桜城に移されたとみられていますが、平時の居館は霞城に置かれ続けていた可能性は十分あると思われます。

サイト(古城跡探訪)による

築城年代は定かではないが治承年間(1177 年～1181 年)に手塚太郎光盛によって築かれたと云われる。手塚光盛は金刺光盛ともいい源義仲の挙兵に従った。寿永 2 年(1183 年) 加賀の篠原の戦いでは、敗走する平家軍の中でただ一人踏みとどまって奮戦する斎藤実盛と壮絶な一騎打ちを行い、その首を討ち取ったことが「平家物語」に記されている。

その後も諏訪大社下社神官の金刺氏が代々居城となった。文明年間(1469 年～1487 年) 頃になると諏訪氏は惣領家と大祝家による内訌が激化する。文明 15 年(1483 年)諏訪大祝継満は、諏訪惣領家の満政と嫡子宮若丸等を上社の神殿に招き、饗応中に不意をついて謀殺し、祭政二権を得ようと画策した。これに呼応するように下社の金刺興春が挙兵し、高島城(茶臼山城)を占領し、桑原・武津に放火して上社を攻めた。しかし 上社方の矢崎・千野・小坂・福島らと宮の腰で戦い金刺興春は討たれ、下社の社殿を焼かれるなど大敗を喫した。その後は興春の子盛昌、昌春と続くが、永正 15 年(1518 年)諏訪頼満によって萩倉の要害は落城し、金刺昌春は武田信虎を頼って甲斐へ落ちた。

サイト(城郭放浪記)による

